さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題を普段着のまま紹介するシリーズ

すなっぷ

『思考自走野球』を追求する

前橋東高校野球部

「監督がいなくても戦えるチーム」を目指す高校野球部とは？

コロナウイルスが猛威をふるう中、高校生はさまざまな制約を受けながらも許される範囲内で部活動を続けています。大勢の部員がソーシャルディスタンスを確保することが困難な活動もありますから感染の不安と背中合わせであることはまちがいありません。特に、からだをぶつけあう運動部団体競技はコロナにも相手チームにも負けない気迫が求められます。

そんな中、私立の強豪校と対等に戦えるチームになることを目指す県立高校野球部を取材しました。このチームが目標とする「監督がいなくても勝てるチーム」「思考自走野球」の言葉に惹かれたからです。

勉強と部活動の両立をはかる前橋東高校

県立前橋東高校は、名前のとおり前橋市の東部、赤城南面の長い裾野が平坦になった江木町に昭和 55（1980）年に男女共学普通科として開設されました。平成 15（2003）年度から普通科系総合学科となり、通学区は全県一区です。1 学年 6 学級（240 人）、昨年度の卒業生の 90%が大学、短大、専門学校に進学しました。その一方で今年度の部活動の結果を HP でのぞいてみると、卓球、テニス、陸上、水泳、女子バレーに優勝、吹奏楽部や放送部に金賞、最優秀賞の文字が見られ、部活動もさかんです。そして、野球部は春季大会でベスト 8 に進出しました。どの部活動でも県内でベスト 8 に進むには大きな壁を乗り越えなければなりません。特に野球では私立の強豪校の壁が高くそびえる。いったい前東はどのように戦ったのか、取材でその秘密を明らかにしようとこころみました。

バントから始まる攻守の練習

10 時に訪問したときにはすでに練習が始まっていました。無死走者 1 塁の場面で攻撃側はひたすらバントで走者を本塁に迎えようとする。4 アウト制。「校庭のグラウンド半面はサッカー部が使うため、通常の試合形式で紅白戦ができないので考えた練習方式です」とあとで小暮監督から聞きました。「これだとどんな場面にどんな攻撃をし、どんな守備を

すればよいかを考えることが多くなります」とも。攻撃側に有利に見えますが、バント自体が思ったよりも難しそうで、走者を確実に送ることは簡単ではない。走者の走塁も鍵を握る。守備側も打者を打ち取るだけでなく、本塁を踏ませない守りが求められる。そこにさまざまな攻防が生まれます。

監督は一切口出ししない

小暮直哉監督は前橋高校が2002年に選抜大会に出場した時の正捕手。大学卒業後、群馬県で教員となり野球部監督として前橋工業高校を選抜大会出場に導きました。前東監督になってから10年になる。

その小暮監督は練習中にまったく口出ししません。業者のトラックが来ると外野に行って砂を下ろす場所を指示し始める。これでよいのだろうか？という疑問がよぎりますが監督の動きは変わりません。このバント練習は午前中いっぱい続きました。

取材に参加した渡辺良光はかつて前橋高校野球部に所属し、現職教員時代には野球部の指導経験もある。その渡辺も、攻守で見られるミスに監督が何も言わないことに違和感を感じたと率直に言います。練習が終わった後で、「ランナー二塁から、セーフティーバントエンドランで、一気にホームを狙うケースが、一回も見られなかったネ」と声をかけたところ小暮監督は、「そういうチームもありますね」と軽く受け流したとのこと。その時、自身が信じてきたセオリーを軽んじられたという憤りに似た気持ちとともに、部員たちを信じ、「思考自走」のチーム作りを目指そうとする小暮監督の姿に、何をも怖れぬ、揺るがぬ信念を感じた、と述懐しました。小暮野球を理解するには的確な言葉だと思われます。

昼休み中に４人の部員にインタビュー

インタタビューに応じてくれたのは主将の田中君、副主将の町田君、青野君（2年生）高瀬君（1年生）。4人とも、小暮先生の「思考自走」野球に憧れて入部したそうです。

Q：小暮先生の指導は、これまでの野球部活動とどう違いましたか？

A「中学まではトレーニング中心の野球だったのですが、思考自走ということで考えてプレイして選手同士も考えてやるようになったので、中学と比べて楽しいです。」

A「中学校ではクラブチームに入っていたのですが、それまでは受け身だったけど、前東ではワンプレイワンプレイに対して疑問をもって自分たちが主になって考えてやるし話し合いとかがあるのが違います。」

Q 先輩後輩とかあるけれど、先輩には言いにくいということはないのですか？

A「前はあったんですけど、ずっと一緒にやってきて、自分も思っている事を言っていかないと変わらないだろうなと思って。まずは、身近に言いやすい先輩に相談して、だんだん言えるようになってきました。」

「前東は先輩と後輩の距離が近いというのがいい点だと思います。」

Q：これまでに悩んだことや苦しかったことを話して下さい。

A 高瀬「自分は主に二試合目に出させてもらうんですが、最近の秋の大会で、力のなさが身に染みてわかって、なんとか成長しようという気でやっているんですが、一気に成長というのは難しくて、どうやったらチームに貢献できるのか悩んで。やっと先月 11 月の時にはこれを挑戦してみようと思ってやって、いい形で終われたんでよかったです。悩みごとがないよりもやっぱり悩んで努力した方が自分のためにもなるので、これからもそういう風にやっていきたい。」

A 青野「自分は去年から出させてもらっているのですが、去年の秋の大会には思うような結果が出せずに先輩たちに迷惑かけているので、冬にトレーニングに励んで、春の大会には思うような結果が出せたので嬉しかったです。勉強との両立は難しいんですけど、前東に来て、時間の使い方とか、みんなから吸収できて、良かったなと思っています。」

A 町田「キャプテンの田中とか青野は力があるし思考力の面でもトップだけど、自分は全然出られなくて、1 年生大会を機に内野から外野に守備を変えてから少しずつ結果が出せるようになってきました。選手の投票で最終選考までいけたというのがすごい自信になりました。副キャプテンに選んでもらって、二人がいない中での試合が一回だけあったんですが、思うようにいかなくて課題も見えたんで、自分もチームの中心という自覚を持っていかなくちゃと思いました。」

Q：選手を選挙で決めるのは難しいのでは？監督が決めてくれた方がいいのでは？

（全部員の投票で、1～9 までの背番号で各ポジション 1 人を選び、その他のベンチ入りの選手を残りの後半から選ぶ。）

A「難しいですね。でも、自分たちで選んだ方が、たとえ負けても割り切れる。」

A「他の高校のチームは技術面だけで選んでいる感じだけど、選手の心の持ちようとか、中にはチームの輪を乱す者もいると思うので、やはり選手同士が一番わかっているのでそういった意味でもいいと思います。」

A 田中「自分は主将になって、急に技術だけでなく役割も任されたので、まわりに支えてもらって助かりました。これからは、自分の調子が悪い時にもまわりに気を配れるかが課題です。」

Q：今日の最後の部員による自主的ミーティングはずいぶん長くかかりましたね。

A 田中「手をあげて言ってもらうんですが、今日は課題もずいぶん見えて、これだけ人数いると一人ひとり見る視点が違うのでいろんな意見が出てきて、それをみんなで吸収することによって、チームの考えも深くなって、思考力もついてくると思います。」

A 青野「考えるだけでなく、自分から発信するのも大事だから。」

Q：目標はありますか。（それぞれ個人としての目標をあげてもらいました）

A 田中「自分自身としては、秋の大会に負けた関学に勝ちたい。」

A 町田「最近、バッティングがだめで、投手陣におんぶに抱っこで不甲斐ない結果が続いてしまっているので、バッティング強化をして、ご飯も一杯食べて身体も大きくして、私立の早い球にも負けないようにこの冬はトレーニングを頑張っていきたい。」

A 青野「安定感のある守備を目標にがんばっていきたい。」

A 高瀬「あきらめないで背番号をとりたい。試合に出たからには勝ちたい。」

小暮直哉監督にずばり！インタビュー

前東野球部のスローガン「思考自走」について、説明していただけますか。

それぞれ選手たちが考えて、指導者がいなくても自分で考えて野球をできるというところが狙いです。「思考」という言葉が自分の中で独り歩きしているところがあって、昔は全然実行が伴わなかったんですが、今は自信をもってそれが言えるようになりました。この学校（前東）に来てから主体的に生徒が頭を使って 一人一人が考えてできればいいなと思っていたんですね。そうするためにはどうしたらよいか、なかなか答えが出てこなかったんですが、ここ 2、3 年、これがいいのかなということが確立されました。2 年前に、自分が前高の生徒の時の松本監督が「自走」というのを掲げてやっているという新聞記事を見て、自分が理想としていることと重なって、いい言葉だなと思い、「思考自走」という言葉を使うようになりました。

とかく言葉が独り歩きしてしまうことが多くて、「のびのび」というのを勘違いされて「放任主義」ととられてしまうこともあります。監督は生徒に気づきをあたえる仕事だと思います。気づきをさせてやると飛躍的に技術が向上することがあります。その気づきを選手みなが共有できればさらに良い結果が生まれると思います。

「思考自走」の達成のために、どんな指導をしているのですか。

選手間のミーティングをとても大事にしていて、練習の前や練習後に選手だけでミーティングをやっていました。昔はなかなか出て

こなかったんですが、今は自然に選手から言葉が出てくるようになりました。でも、まだそれでは自分の中では物足りない。ベストとしては、プレーの中でミーティングをしてるかのような会話が飛び交うというようなことを目指しています。試合の時は、内野だけなら集まれますが、全員で集まる機会はありません。自分のポジションから言葉のキャッチボール、つまりいろいろな確認や互いに鼓舞し合うことができないとだめだと考えています。そのプレー中のコミュニケーションを大事にするということをテーマにやってきて、ようやくそれがこのチームやその前のチームからできるようになってきました。

また、野球ノートと言って、ローテーションで練習メニューや感想をＳＮＳ上に書いてもらっているのですが、次第に内容のレベルが高くなっていて感心することばかりです。

指導者として気をつけていることは？

監督として言葉で伝えていることは、もっとも大事なこと、そして選手たちみんなが気づけなかったことだけを言うようにしています。これだけずっと練習をしていると、誰かしらが何かを気づいてくれるので、その時は自分はそれを絶対言わないようにしています。でも、暫くやっていて気づけそうにないと思うことについては言っています。時には言いたいのを我慢することもあります。最近は、自分が伝えたいことが選手からもぽっと出ることが多くなって、我慢することは少なくなりました。

コロナの影響はどうでしたか

コロナの影響が大きくて、去年は練習が全くできないので、短い時間の中でいかにチーム力を高めていくか、組織力を高めていくかが課題でした。試行錯誤しながらやってよかったことは、リーダー制です。昔は、キャプテンや副キャプテンに仕事を負わせすぎてしまって、彼らが周りのことが見えなくなってしまうことがありました。真面目な子たちの集まりなので、その子たちを引っ張っていく存在に育てたいと思いました。リーダー性を育てたいと思いました。そこで、「～係」をあえて「～リーダー」という呼び名にして、それぞれに役割の重要性を自覚させるようにしました。仕事を分担するというだけでなく、リーダーから自発的に研究し提案するような場面があることで、ひとりひとりが積極的に発言して、学年間の垣根も取り払うことができると考えました。それが、野球の練習のミーティングの際にも生かされるようになりました。思ったことを正直に言い合う関係ができあがってきました。

分散登校の頃は、部活動全体としては対外試合はもちろんまとまった練習や激しい運動はできなかったのですが、徐々に通常にもどってきました。体育の授業も同様です。その時々で制限はありましたが、みんなで楽しく身体を動かすということでやってきました。制限がなくなったあとの野球部の活動について、一時期練習時間も短くなり練習量も減ったのですが、練習再開後にずいぶんうまくなっている生徒がけっこういました。自粛期間

中に各自でフォームを研究したり練習方法を考えたりして、どうすればうまくなれるかをそれぞれが模索した結果が表れたと思います。それを見て、練習時間や練習量だけでなくいかに自分で考えて練習に取り組めるかが大事かということがわかりました。身体を動かすと同時に頭もうごかすこと、思考を停止させないで思考し続けることだと思います。

投票でレギュラーを決めるのは何故ですか

レギュラー決めは、部員同士による投票です。顧問が決めるわけではありません。顧問には一切その権利がないんです。顧問が選手を気に入るとか気に入らないとかという意味が、私にはわかりません。そう思わせる指導じゃだめだと思います。気に入られるために、ああしようこうしようじゃチームとしても成長しないと思います。この子たちは、指導者からの目はあまり意識していません。他の学校ではレギュラーを顧問が決めるのがほとんどだと思いますが、そうなると保護者も指導者を意識するようになって、それは絶対避けたいと思いました。

結局、指導者が選手を見ているのは全体練習のほんの一部だけだし、それ以外の練習や学校生活や部室での様子などのほとんどをチームメイトは見ているので、彼らに投票してもらうのが間違いないことだと思います。この学校に来た当初から投票でしたが、20 人中最後の 2 人は監督が選んでいました。今ではそれもやめて全員投票で選ぶことにしました。完全に彼らに任せています。

理想の指導者像について、話して下さい

こういう大人になりたいなと思ってもらい

たいと思ってやっています。監督という武器に従わせるような人間にはなりたくない。かつて私もキャプテンに負担をかけすぎてしまっていて、それは他の高校でもそうですが、結局、うまくいかない時に監督自らの責任にしたくないためにキャプテンになすりつけているのではないかと思います。でも、それは絶対にあってはならないことです。普段からリスペクトしつつキャプテンを育てる視点が監督には必要だと思います。監督がいろいろ背負ってキャプテンを守りながら、キャプテン自身が視野を広げて気づいていけるようになることが大事だと思います。

私は、かつて部活の時とそうでない時とで生徒の接し方が微妙に違っていました。もともと、あまり強く言う方ではないのですが、部活の時はちょっと厳しめにという風に。でも、今は部活の時でも授業の時でも自然体というか、全く変わりません。

小暮先生にとって、部活動のやりがいは？

入学当初はみんなそれまでの指導のとおり思考力も技術も備わっていないんですけれど、二年生になるとずいぶん変わってきます。教員の力だけでそれを高めるというのは無理なことで、先輩から後輩へ色々なことがいかに伝えられるかということが大事だと思っています。私が何か特別なことをしたというわけではなくて、上級生が大人になっていき、心が成熟していく。その成熟した上級生を信じて下級生がいろいろなことを 身につけていくことで自然に思考力や表現力が身についているのではないかと思います。生徒に任せることが良い循環につながっていると考えます。

今、生徒を見ていると頼もしく感じます。特に２年生は大人になってきたなあと思います。子どもたちの成長に立ち会えることが部活動に関わる醍醐味です。

取材を終えて

取材の前に前橋東高校ホームページから「前東野球部通信」を開いてみました。マネージャーと監督が発行人です。中学生に向けたメッセージの中に「思考自走」「監督がいなくても勝てるチーム」の言葉がおどっていましたが、「本当に？」の思いもぬぐえませんでした。しかし実際に練習を取材してこの言葉に確固たる根拠があることを確かめました。本号の表紙に掲載した自主ミーティングの写真がその一端を示しています。

そして小暮監督のインタビューでは、部活指導に留まらず、監督自身を含めて人を育てることを目指す「思考自走」であることが深く重く伝わってきて胸を打たれました。

取材に応じてくださった前橋東高校野球部のみなさまに心より感謝申し上げます。

《取材・撮影・編集：大山仁、倉林順一、瀧口典子、渡辺良光》